

“ありがとう”

静岡県 浜松市立北部中学校 3年

小木曾 莉桜（こぎそ りお）

「りおちゃんの言葉は私の薬」

私はこの言葉に大きな衝撃を受けた。

中学1年生の頃、クラスに「一型糖尿病」をもつ女の子がいた。彼女は食後必ず注射を自らの手で打つ。そして、血糖値が高すぎたり低すぎた際にはまた別の注射を打つ。毎日それをくり返していた。「打たなければ死ぬ」という恐怖、注射の痛み、当事者になってみなければわからないことだが、「辛く苦しいこと」だというのは私にでもわかる。

入学し、彼女が自分の病気について明かしてから何日かたったある日、

「なんであんな奴、俺らの学校に来たんだよ。」

そう、一人の男子が言ったのだ。その一言をきっかけに彼女は周りから以前とは違う目で見られるようになった。そしていじめへと発展した。

「病気をもっているから私達とは違うという勝手な偏見や差別、このようなことはあってはならない。」私はそう思った。でもそれを言えなかった。怖いから、いじめられるのが……。もし、自分にいじめのまがが変わったらどうしよう、と自分のことだけを考えていたのだ。結局、私がやっていたのは見て見ぬふりで、いじめている人たちと何も変わらない。

私たちが彼女を見る目は悲しくなるほど冷たいものだった。私たちのその目や、ひとつひとつの小さな言葉がどれだけ彼女の心に傷をつけたことだろう。それから彼女は学校を休む日が多くなった。

「今日もいねえじゃん、ラッキー。」

「○○？誰それ？そんな奴いたっけ。」

まだそんなことを言っているの？とはやはり言いたくても言えなかった。

ある日、彼女が過呼吸になっていた。私は、

「大丈夫？」

と声を掛けた。言おうと思って出た言葉ではない。無意識でとっさに出た言葉だった。

「ありがとう」

そう返って来た。“ありがとう”この言葉を聞いて今まで自分がしていたことを心底後悔した。人の心を傷つける言葉があるのなら人の心を癒す言葉もあるだろう。そして私がかけた「大丈夫？」という一言が傷ついた彼女の心を癒したのだと思う。“ありがとう”この一言で、私は「変わろう」と思った。だから私は

声を掛け続けていこうと決めた。

私が彼女を手伝っているのを見て、文句や悪口を言う人はたくさんいた。しかしその分

「私にもできることある？」

と私の味方をしてくれる人たちもいた。怖くて言い出せずにいた人は私以外にも大勢いたのだ。私が少し変わったことで周りにはいる人たちも大きく変わった。人は人で変わると改めて思った。

たくさんの方が彼女と話すようになり彼女は元通り学校に来るようになった。本当に嬉しくて変わって良かったと思えた。

一年生終了と同時に私は引っ越すことになり、皆が私に手紙をくれた。ひとりひとりの手紙を読んでいくと、彼女からの手紙を見つけた。ぎっしりと文字がつままっていて、私へのお礼の文がそこにはつづられていた。そして最後の一文に「りおちゃんの言葉は私の薬でした」とあった。言葉にはそれほどの力があるのだと確信した。

私一人では、彼女へのいじめを止めることはできない。いじめは、いじめる人が変わらなければ終わらないと思う。でも、私一人でも彼女を助けることはできる。それは、一言かけるだけ。たった小さな一言でも、彼女にとってはとても大きいもので彼女の心を支えることができる。

はじめに一人変わることによって周りも変わり、その周りも変わる。私はそのはじめの一人になりたい。そして、皆の心の支えとなる存在になりたい。これは私の夢だ。

自分自身を変えることというのはいじめを減らすために私ができる最善のことだと思う。

自分を変えるというのはとても難しいことだけれど夢を叶えるために私は実行してみせる。

私は彼女に出会えたことにとても感謝している。私をこれほどに成長させてくれたのは彼女だ。

そんな彼女に私は「ありがとう」の言葉を返したい。

